Continue

「ネコ科の野生動物」と聞いて頭に浮かぶ動物といえば、ライオンやトラという方が多いのではないでしょうか。 しかし「ネコ科の野生動物」にはそっくりすぎて違いがよくわからない3種の動物がいます。それは、チーター・ヒョウ・ジャガー。 このコラムではこの3種の動物の違いや見分け方についてご紹介。彼らのあまり知られていない魅力を発見できますよ。 この俊足からは逃げられない！？世界最速の「チーター」「チーター」といえば、足が速い動物。国内には約104施設の動物園がありますが、チーターを飼育している動物園は約13施設。 なかなか実物を見ることのできないチーターの特徴、ヒョウやジャガーとの違いや見分け方などを紹介します。 「チーター」はどんな動物？ チーターはアフリカのサハラ砂漠以南、西アジア、中近東などのサバンナに生息。 体長は110cm〜150cm、体重は40〜70kg。小顔で手足が長くほっそりとした体型です。 柄は茶系のボディに黒い斑点。顔には目頭から口に沿って涙の跡のような黒い線が入っています。この黒い線は昼行性のチーターの目を日中の眩しい光から守る効果があるそうです。 チーターの簡単な見分け方は、顔の黒い線の有無！ 世界最速「チーター」の弱点 チーターは世界最速の動物。走り始めて約3秒で時速100kmに到達します。その俊足から世界最速かつ最強と思われがちですが、実は2つの弱点があります。 ひとつは「持久力に欠ける」こと。世界最速の足を持っているのに約500m走るので精一杯。狙われた獲物も必死に逃げるので狩りが失敗に終わることもしばしば。 もうひとつは「顎の力が弱い」こと。サバンナでは獲物を仕留めたら素早く食べないと他の動物から横取りされてしまいます。チーターは顎の力が弱いので食べるのが遅く、他の動物から横取りされることが多いそうです。 豆知識 他の大型のネコ科と比べて体も足も長いチーター。さらに背骨の柔軟性も高く、体をうまく曲げ伸ばしして歩幅を長くしています。 『後ろ脚で蹴り上げる⇒地面に前足を着ける⇒そのさらに先に後ろ足を出して着地』を繰り返すチーターは走っている間体はほとんど空中にあり、まるで空を飛んでいる状態です。 また、足先の爪をネコのように隠すことができず常に爪が出たままになったいます。この爪がスパイクの役割を果たし、しっかりと蹴りだすことに役立っています。 「チーター」の性格は？ チーターは臆病で慎重な性格。他の動物から獲物を横取りされそうになると争わずに自らその場を離れるそうです。ムダな争いはしない平和主義者ですね。 また、人間によくなついて温厚な性格に育つので海外ではチーターをペットとして飼っている人もいます。 人間界でメジャーになったレオパード柄の持ち主「ヒョウ」「ヒョウ」といえばレオパード柄(またはヒョウ柄)。洋服・靴・バッグ・ポーチ・ネイルなど私たちの生活に溶け込んでいる柄ですね。筆者もレオパード柄のスニーカーを長年愛用しています。 国内でヒョウを飼育している動物園は約12施設。チーターと同じく少ないですね。そんなヒョウの特徴をご紹介します。 「ヒョウ」はどんな動物？ ヒョウはアフリカ大陸、アラビア半島、東南アジアなどに生息。ネコ科の野生動物の中では最も幅広い地域に生息していて地域によってはユキヒョウやクロヒョウなどの亜種が存在しています。寒い地域のヒョウは柄が大きく毛が長い、暑い地域のヒョウは柄が小さく毛が短い傾向にあります。 体長は100cm〜150cm、体重は30〜90kg。チーターよりもムチっとした体型です。 柄は茶系のボディにロゼットと呼ばれるバラの花が開花したような形をした斑点。その斑点は内側のオレンジ色を囲むように外側に黒い花びらのような模様が付いています。 ヒョウの簡単な見分け方は、多くの方が見たことのあるレオパード柄！ 「ヒョウ」は木登りが得意 ヒョウは運動能力が高く木登りが得意。敵が近くにいるときは仕留めた獲物を木の上に持ち上げて枝や葉で隠します。ヒョウは顎が強いので獲物を木の上まで持ち上げることも楽々。 夜行性のヒョウにとって木の上は安心できる場所なので、昼間は木の上で寝て夜になると木から下りて活動します。 またジャンプ力が高く、垂直には約3m、地面と平行には約6mも跳ぶそうです。 「ヒョウ」の性格は？ ヒョウは基本的に群れを作らず単独行動を行う動物。それぞれが広い縄張りを持ち、尿・糞・地面掘りなどでマーキングをします。ネコ科野生動物界の一匹狼ですね。 一匹狼なので自由奔放なイメージがありますが、実は警戒心が強く慎重に行動をする性格の持ち主です。 ちょっと珍しい色のヒョウたち 白・グレー・薄いベージュなどの体毛で覆われて柄がくっきりとしていない「ユキヒョウ」は「ユキ(雪)」という名前の通り、中央アジアのアルタイ山脈やヒマラヤ山脈など極寒の山岳地帯に生息しています。雪景色に溶け込むカラーがかわいいユキヒョウですが地球温暖化や密猟により絶滅危惧種になっています。 また「クロヒョウ」も珍しい色のヒョウです。ノーマルカラーの両親から突然生まれることもある真っ黒いヒョウ。パッと見は黒1色ですが、よく見るとロゼット模様の斑点があります。こちらも頭数が少ないので準絶滅危惧種になっています。 体が大きく運動能力も抜群！南米最強捕食者「ジャガー」 チーター・ヒョウ・ジャガーの中で「ジャガー」が1番わからないことが多い動物という印象を持った筆者ですが、皆さんはいかがでしょうか。 国内でジャガーを飼育している動物園は約10施設と少なめ。実物を見ることができたらラッキーかもしれないジャガーの特徴、チーターやヒョウとの違いや見分け方などを紹介します。 「ジャガー」はどんな動物？ ジャガーは北アメリカ大陸南部や南アメリカ大陸に生息。この地域の生態系の頂点に君臨しています。見た目がヒョウと似ているのでアメリカヒョウと呼ばれることも。 体長は120cm〜180cm、体重は50〜130kg。チーターやヒョウより大きいです。 柄はヒョウと同じく茶系のボディにロゼット模様の斑点がありますが、ジャガーには斑点の中心部分に黒い点があります。 ジャガーの簡単な見分け方は、この黒い点の有無ですね！「ジャガー」は高いスペックの持ち主 ジャガーは手足が短くガッシリとした体型。しかし運動能力は高く、ヒョウのように木登りをしたり、陸上での狩りはもちろん水辺での狩りも得意。上手に泳いで魚やカメを獲ったり、ときにはワニに襲いかかることも。前脚の力が強く狩りのときには獲物を前脚で叩いて捕らえることもあります。 また、水辺にいる獲物を狙うときは水中に隠れて待ち伏せをし、チャンスが来たら獲物に襲いかかるそうです。南米最強捕食者と呼ばれるのも納得ですね。 「ジャガー」の性格は？ ジャガーは単独行動を行う動物。南米最強捕食者と恐れられていますが、性格は意外にも慎重派。 他のジャガーとの無意味な争いを避けたり、人間を見ても警戒して近づいてこないそうです。しかし縄張りが侵されれば猛然と襲いかかってくるので注意が必要です。 【番外編】模様のないシンプルボディ！「ピューマ」 番外編として「ピューマ」を紹介します。 ピューマは英語で書くと【puma】 そう！多くの方がご存知のスポーツメーカー "PUMA"のモデルになっている動物です。 スポーツメーカーの名前にまでなっているプーマですが、生態は知らない…という人がほとんどではないでしょうか？ 「ピューマ」はどんな動物？ 「ピューマ」は北アメリカ大陸と南アメリカ大陸の幅広い環境に適応しており、森林や高山だけではなく半砂漠などにも生息。 体長は85cm〜150cm、体重は30〜100kg。狩りに適した強くてたくましい体型をしています。 ピューマは柄が全くない茶系のボディ。 ピューマの簡単な見分け方は、柄の有無です！ 高い身体能力と賢さを合わせ持つ「ピューマ」 ピューマはネコ科の野生動物の中でも特に眼球が大きく視力が優れていて、数百メートル離れた場所からでも獲物を見つけられます。 またジャンプ力にも優れていて約5mの高さの木の枝まで垂直にジャンプすることができるそうです。 ピューマは捕らえた獲物を他の動物に取られないように、土・落葉・雪などを使って隠して保存する賢い動物。その保存した獲物を数回に分けて食べながら、厳しい自然界を生き抜いています。 「ピューマ」の性格は？ 狩りに適した強くてたくましい体型のピューマですが、性格は穏やかで警戒心が強く人を襲うことはほとんどないそうです。 ロシアに住むとある夫妻は自宅でピューマをペットとして飼育しています。人懐こくて甘えん坊な性格なので大きめなネコという感じらしいですよ。 それぞれ異なる魅力の「チーター・ヒョウ・ジャガー」 ネコ科の野生動物のそっくりさん達、チーター・ヒョウ・ジャガー・ピューマの違いや見分け方を紹介しました。 見た目以上に大きく違うところもあれば、見た目通り似ているところもあったのではないでしょうか。同じネコ科の野生動物でもそれぞれ異なる魅力があって興味深いですよね。 動物園で見かけたら、それぞれの違いにぜひ注目してみてくださいね。 関連記事 Africa チーターはどんな動物？特徴、生態、生息地について解説します。時速100kmを超えるスピードで獲物を捕らえることができるとても優秀な肉食動物ですが、同じ肉食動物でもライオンやハイエナなどに追われることもあります。特徴や性格など解説をしていきます。 特許取得成分配合！『カナガンデンタルキャットフード』 チーター（cheetah）は哺乳綱食肉目ネコ科チーター属に分類される食肉類、哺乳類。学名はAcinonyx jubatus。体長は110 – 150cmで体重は35 – 72kg。尾長60 – 90㎝、肩高67 – 94㎝です。陸上のトラで速く走ることができる動物でアジアやアフリカの動物です。園内ではイベントなどで案内されることがあります。情報の一覧は以下のようになります。 Japanese（和名）チーターEnglish（英名）Cheetahscientific name(学名)Acinonyx jubatusclassification（分類）Mammalia、 Carnivora、 Felidae、Felinae哺乳綱、食肉目、ネコ科、チーター属IUCN Status(保全状況)ENDANGEREDLength（体長）110 – 150cmWeight（体重）35 – 72kg チーターはネコ科に分類されています。以下のような亜種が存在します。 Acinonyx jubatus jubatus Acinonyx jubatus fearsoni Acinonyx jubatus hecki Acinonyx jubatus soemmeringii Acinonyx jubatus venaticus チーターは主にアフリカに生息しています。アフリカ大陸、サハラ砂漠やイランなどで見れます。 チーターはサバンナ内の草原や疎林・低木林に生息し、頭部は小型、耳介は小型で犬歯および歯根は小型。四肢は細長いです。爪をおさめる鞘がなくひっこめることができません。獲物を追跡するときは、走行速度が2秒で時速72kmと言われており、驚異的です。樹上に登ることもあり臭い付けをします。チーターは主に単独で生活しますが、子供と家族で群れを形成することもあります。 チーターは失敗をしても落ち込まず、粘り強い精神力を持っています。その一方で猫らしさもあり、気まぐれでわがままなところもあります。 チーターは小型から中型有蹄類、大型有蹄類の動物を食べて生活をしています。繁殖様式は胎生。妊娠期間は3か月あり、1回につき2 - 4頭産むことが可能。子供は生後15 – 17か月で狩りができるようになります。寿命は11年～15年と言われています。 チーターは無敵ではありません。天敵はリカオン、ジャッカル、ライオンとヒョウです。 空からはワシなどにも襲われており、特に子供が狙われてしまいます。 残念ながらチーターは絶滅危惧種に指定されています。1970 – 1980年代における推定個体数は15,000頭と言われています。チーターの毛皮はよく売れます。毛皮目的の狩猟がとても増えており、業者によって殺されています。その他ではペット用に乱獲されてしまうことも多いです。 生息地の破壊によってチーターの住む地域はとても狭くなっています。害獣としての駆除されることもあり、農家の飼育する家畜などが襲われると報復で駆除されてしまっています。 残念ながら絶滅危惧種に指定されていますので生息数がそもそも少なく、飼育できません。動物園で鑑賞しましょう。とても足が速いことで知られており、速さが理由でゲームやイベントの展示などでも登場する有名な動物。他よりも知名度が高く名のしれた動物です。 イギリス産・自然素材にこだわったキャットフード『アランズナチュラルキャットフード チキン&ターキー』 There are three stages in the life cycle of the cheetah: cub (birth to 18 months), adolescence (18 to 24 months) and adult life (24 months and on). The gestation (pregnancy) period for the cheetah is 93 days, and litters range in size from one or two up to six cubs (the occasional litter of eight cubs has been recorded, but it is rare). Cub mortality is higher in protected areas like national parks and wildlife reserves where proximity to large predators is greater than in non-protected areas. In such areas, the cheetah cub mortality can be as high as 90%. Adult life for a cheetah in the wild is difficult. Cheetahs in the wild (both male and female combined) have an average age span of 10 – 12 years. The average lifespan of an adult male in the wild skews lower (8 years), due in part to territorial conflicts with competing groups of males. Adult mortality is one of the most significant limiting factors for the growth and survival of the wild cheetah population. Threats to the Cheetah Captive Population Info Cheetah cubs Adolescent cheetahs Adult cheetahs' weight averages between 75 and 125 pounds. They can measure from 40 to 60 inches in length, measured from the head to the hind quarters. The tail can add a further 24 to 32 inches bringing the total overall length up to 7.5 feet. On average, cheetahs stand 28 to 36 inches tall at the shoulder. The cheetah is a sexually dimorphic species though it is difficult to identify cheetahs' sex by appearance alone. Male cheetahs are slightly bigger than females and they have larger heads, but they do not display the same degree of physical difference between the sexes of other big cat species like lions. Cheetahs have a thin frame with a narrow waist and deep chest. They have large nostrils that allow for increased oxygen intake. Cheetahs have a large lungs and hearts connected to a circulatory system with strong arteries and adrenals that work in tandem to circulate oxygen through their blood very efficiently. With its long legs and very slender body, the cheetah is quite different from all other cats and is the only member of its genus, Acinonyx. The cheetah's unique morphology and physiology allow it to attain the extreme speeds for which it's famous. Markings The cheetah's undercoat ranges in color from light tan to a deep gold and is marked by solid black spots. These spots are not open like the rosettes found on a leopard or jaguar's coat, which is one way to quickly identify the cheetah. Distinctive black tear stripes run from the eyes to the mouth. The stripes are thought to protect the eyes from the sun's glare. It is believed that they have the same function as a rifle scope, helping cheetahs focus on their prey at a long distance range by minimizing the glare of the sun. Cheetah tails end with a bushy tuft encircled by five or six dark rings. These markings provide them with excellent camouflage while hunting and make them more difficult for other predators to detect. The tail is also thought to be a signaling device, helping young cubs follow their mothers in tall grass. The tip of the tail varies in color from white to black among individuals. The cheetah is the world's fastest land animal and Africa's most endangered big cat. Uniquely adapted for speed, the cheetah is capable of reaching speeds greater than 110 kilometers per hour in just over three seconds. At top speed, their stride is seven meters long. The cheetah's unique body structure: flexible spine, semi-retractable claws, long legs and tail allow it to achieve the unbelievable top speed of 110 km/hr (70 mph). The cheetah's body is narrow and lightweight with long slender limbs. Specialized muscles allow for a greater swing to the limbs increasing acceleration. Cheetahs' foot pads are hard and less rounded than the other cats. The pads function like tire treads providing them with increased traction in fast, sharp turns. The short blunt claws, which are considered semi-retractable, are closer to that of a dog than of other cats. The claws work like the cleats of a track shoe to grip the ground for traction when running to help increase speed. Cheetah running at CCF's Centre in Namibia The flexibility of the cheetah's spine is unique. The cheetah's long muscular tail works like a rudder, stabilizing, and acting as a counterbalance to its body weight. Swinging the tail back and forth continually adjusting to the movement of prey allows for sudden sharp turns during high speed chases. The cheetah's shoulder blade does not attach to the collar bone, thus allowing the shoulders to move freely. The hips pivot to allow the rear legs to stretch far apart when the body is fully extended. The hip and shoulder extension allows for a large range of extension during running, thus making both its exceptional stride length. The length between their steps is six to seven meters (21 ft) and four strides are completed per second. There are two times in one stride when the cheetah's body is completely off the ground: once when all four legs are extended and once when all four legs are bunched under the body. At birth, the cubs weigh 8.5 to 15 ounces and are blind and helpless. Their mother will groom them patiently, purring quietly and providing them warmth and security. After a day or so, the mother will leave the cubs to hunt for herself, so she can continue to care for the cubs. This is the most vulnerable time for the cubs, as they are left unprotected. They will live in a secluded nest until they are about six to eight weeks old, being regularly moved by their mother from nest to nest to avoid detection by predators. The mother will care for her cubs on her own for the next year and a half. At about six weeks of age The cubs begin following their mother on her daily travels as she is looking for prey. During these first few months she cannot move far or fast and cub mortality is highest. Fewer than one in 10 cubs will survive during this time, as they perish from predation by other large predators such as lions and hyenas, or from injuries. This is the time when life skills are taught. Cheetah cubs have a thick silvery-grey mantle down their back. The mantle helps camouflage the cubs by imitating the look of an aggressive animal called a honey badger. This mimicry may help deter predators such as lions, hyenas, and eagles from attempting to kill them. Cubs lose their mantle at about three months of age. Between four to six months of age Cheetah cubs are very active and playful. Trees provide good observation points and allow for development of skills in balancing. The cubs' semi non-retractable claws are sharper at this age and help them grip the tall 'playtrees' they climb with their siblings. Learning to hunt is the most critical survival skill that the cubs will develop. At one year of age, cheetah cubs participate in hunts with their mother. At about 18 months of age The mother and cubs will finally separate. Although not fully adept at hunting on their own, independent male and female cubs will stick together for a few more months to master their hunting skills. When the adolescent females begin cycling, dominant males will court them and drive their brothers away. Learning to hunt begins early Learning to hunt through play continues into adolescence, cheetahs stay with their mother for about 18 months. As the female siblings become sexually mature they will split from the group to lead a largely independent life. Male siblings remain together for the rest of their lives, forming a group known as a coalition. Coalitions increase hunting success and act as a defense against other predators. When the split from sisters occurs, the males will roam until they can find and defend a territory. This process can take a few years and males may travel hundreds of miles, being moved out of one area to another, pushed on by more experienced male coalitions. Eventually, the group will find a place where they can settle. This will become the coalition's territory and could span 15 to 30 square miles. Cheetahs that become orphaned at a young age, and are brought into a rehabilitation situation, can be paired with non-related individuals to form a coalition. When these cheetahs are released back into the wild, the created coalitions will often remain intact throughout the life of the individuals. Coalition of male cheetahs Females lead solitary lives unless they are accompanied by their cubs. Unlike male cheetahs that prefer to live in set territories with their coalition, females travel within "home ranges" that overlap multiple male groups' territories. Female cheetah home ranges depend on the distribution of prey. If prey is roaming and widespread, females will have larger ranges. Estrus in female cheetahs is not predictable or regular. This is one of the reasons why it is difficult to breed cheetahs in captivity. Mating receptivity depends on environmental factors that, researchers have found, are triggered by the proximity of males and their scent markings. Estrus lasts up to 14 days and females will mate with multiple males during this time period. Male cheetahs that encounter a female cheetah in estrus will stay with her and mate up to three days and at intervals throughout the day. When it comes to mating, there are no dominant males within the coalition that claim exclusive access to females. All males within a coalition will mate. During the last Ice Age the world's population of cheetahs plummeted to just a handful of individuals. This event caused an extreme reduction of the cheetah's genetic diversity, resulting in the physical homogeneity of the species' current population. Cheetahs are so genetically similar that in experiments, reciprocal skin grafts from unrelated cheetahs were accepted by the other's immune system due to the animals having similar major histocompatibility complex (MHC) genotypes. Researchers have discovered that suitable levels of genetic diversity are vital to any population's ability to adapt and overcome environmental changes and unexpected disasters. Unsustainable human expansion and irresponsible consumption can cause pressure on ecosystems worldwide. Population research has shown that when habitat is destroyed and populations become fragmented and isolated, the rate of inbreeding increases and the genetic diversity lowers. Physiological impairments such as: poor sperm quality, focal palatine erosion, susceptibility to infectious diseases, and kinked tails are a result of low genetic diversity within both the wild and captive cheetah population. Cheetah sperm under a microscope Kinked tail Cheetahs are visual hunters. Unlike other big cats cheetahs are diurnal, meaning they hunt in early morning and late afternoon. Cheetahs climb 'playtrees' or termite mounds to get an optimal vantage point for spotting prey against the horizon. The hunt has several components. It includes prey detection, stalking, the chase, tripping (or prey capture), and killing by means of a suffocation bite to the throat. The prey species on which the cheetah depends have evolved speed and avoidance techniques that can keep them just out of reach. Cheetahs prey includes: gazelles (especially Thomson's gazelles), impalas and other small to medium-sized antelopes, hares, birds, and rodents. Cheetahs will also prey on the calves of larger herd animals. Cheetahs generally prefer to prey upon wild species and avoid hunting domestic livestock. The exception happening in sick, injured and either old or young and inexperienced cheetahs. Generally, the livestock animals that are lost to predation by cheetahs are also sick, injured and old/young. Keeping livestock in kraals and utilizing non-lethal means of protection can dramatically reduce livestock predation. Stalking Successful hunt While cheetahs can reach remarkable speeds, they cannot sustain a high speed chase for very long. They must catch their prey in 30 seconds or less as they cannot maintain maximum speeds for much longer. Cheetahs spend most of their time sleeping and they are minimally active during the hottest portions of the day. They prefer shady spots and will sleep under the protection of large shady trees. Cheetahs do not hunt at night, they are most active during the morning and evening hours. The cheetah serves a special role in its ecosystem. Cheetahs are one of the most successful hunters on the savanna but their kills are very often stolen by larger carnivores or predators that hunt in groups. Predators play an important role in any ecosystem. They keep prey species healthy by killing the weak and old individuals. They also act as a population check which helps plants-life by preventing overgrazing. Without predators like the cheetah, the savanna ecosystem in Namibia would be very different and the current ecological trend toward desertification would be accelerated. Unlike other "big cats", a classification that includes: lions, tigers, leopards, and jaguars) cheetahs don't roar. They growl when facing danger, and they vocalize with sounds more equivalent to a high-pitched chirp or bubble and they bark when communicating with each other. The cheetah can also purr while both inhaling and exhaling. Purring Moan/Spit Hissing and threat display Relatives of the modern cheetah had worldwide distribution until about 20,000 years ago, when the world's environment underwent dramatic changes during the Great Ice Age. Only a handful of individuals remained. The population of cheetahs rebounded. Up until ~10,000 years ago their range spread across the entire African continent (minus the Congo Basin and the Sahara Desert) and into Asia from the Arabian Peninsula to eastern India. Today, cheetahs are found in only 9% of their historic range and are functionally extinct. Once found throughout Asia and Africa, today there are fewer than 7,100 adult and adolescent cheetahs in the wild. Protected Status Currently, cheetahs are listed as Vulnerable on the IUCN Red List. In Namibia, they are a protected species. Under the Endangered Species Act in the United States, they are considered Endangered. The Convention on International Trade in Endangered Species (CITES) lists them as an Appendix 1 species. Most wild cheetahs exist in fragmented populations in pockets of Africa, occupying a mere 9 percent of their historic range. In Iran, fewer than 50 Asiatic cheetahs (a sub-species) remain. The largest single population of cheetahs occupies a six-country polygon that spans Namibia, Botswana, South Africa, Angola, Mozambique and Zambia. Namibia has the largest number of individuals of any country, earning it the nickname, "The Cheetah Capital of the World." More than 75 percent of remaining wild cheetahs live on rural farmlands alongside human communities. Fossil of Acinonyx pardinensis (giant cheetah), Museum Histoire Naturelle, Paris. Extinct ancient cheetah species closely related to the modern cheetah, was as tall as an African lion at the shoulder. The giant cheetah lived in Europe and was roughly twice the size of modern cheetahs. In captivity cheetahs can live from 17 – 20 years. In countries across Africa, like Namibia, it is illegal to capture and take live cheetahs from the wild. Also in the majority of African countries, like Namibia, it is illegal to keep cheetahs under private ownership or as pets. Cheetah Conservation Fund and other Africa-based NGOs keep populations of injured or orphaned animals in captivity as part of rehabilitation and rewilding efforts. Suitability for release is dependent on: the age of the individuals when they became orphaned the degree to which human intervention was required for their survival Very young and extremely ill animals will have greater degrees of contact with human caretakers. Survival in the wild depends on an aversion to humans and avoidance of human populations. Cheetahs that require hand-rearing and prolonged medical treatment do not possess an adequate fear of humans for life in the wild, especially when their territories are increasingly likely to be shared by human settlements. Zoos and Conservation Accredited zoos around the world participate in captive breeding programs that track the genetic suitability for mating pairs. Accreditation criteria differs between accrediting organizations. Accreditation in most cases requires that zoos holding captive cheetahs must support conservation work. Cheetah Conservation Fund lists the zoos that fund our conservation work here. Cheetah Conservation Fund manages the International Cheetah Studbook for captive cheetah populations. Dr. Marker and Catherine Hilker at the Cincinnati Zoo's Cheetah Breeding Facility As with all other species fighting extinction, the problem facing the cheetah is complex and multifaceted. However, most of the reasons for the cheetah's endangerment can be grouped into three overarching categories: human-wildlife conflict, loss of habitat and loss of prey, poaching and illegal wildlife trafficking, with cubs being taken from the Horn of Africa and smuggled into the exotic pet trade, primarily in the Gulf States. Unlike other large cats and pack predators, cheetahs do not do well in wildlife reserves. These areas normally contain high densities of other larger predators like the lion, leopard, and hyena. Predators such as these, compete with cheetahs for prey and will even kill cheetahs given the opportunity. In such areas, the cheetah cub mortality can be as high as 90%. Therefore, roughly 90% of cheetahs in Africa live outside of protected lands on private farmlands and thus often come into conflict with people. When a predator threatens a farmer's livestock, they also threaten the farmer's livelihood. Farmers act quickly to protect their resources, often trapping or shooting the cheetah. Because cheetahs hunt more during the day, they are seen more often than the nocturnal predators which contributes to a higher rate of persecution on the cheetah. Cheetahs require vast expanses of land with suitable prey, water, and cover sources to survive. As wild lands are destroyed and fragmented by the human expansion occurring all over the world, the cheetah's available habitat is also destroyed. Available habitat is fragmented, and degraded reducing the number of animals an area can support. Numerous landscapes across Africa that could once support thousands of cheetahs now struggle to support just a handful. Learn more about CCF's efforts to prevent and mitigate habitat loss. Habitat Loss In many parts of the world there are strong cultural associations to keeping cheetahs as companions. There is a long history of the practice and it is commonly seen in ancient art. In contemporary times, cheetahs are still viewed as status symbols. Though cheetah ownership and exotic pet ownership has been outlawed in many countries, there is still a high demand for cheetahs as pets. Cubs are illegally captured from the wild and only one in six survives the journey to a potential buyer. Learn more about CCF's efforts to end the illegal trade in cheetahs across the species range. Illegal pet trade Learn more with CCF's Books Share with friends【分類】哺乳綱　食肉目　ネコ科【生態】アフリカの草原などに広く生息する。以前は中東やインドにも生息していたが、現在は中東の一部を残すのみである。主にウサギやガゼルなどの小～中型の哺乳類を捕食する。地上最速の動物で瞬間的に時速約110kmで走ることができるが、長い距離を走るのは苦手である。速く走るために特化した体型をしており、体全体の割合にくらべ、頭が小さく肢が長い。また、爪の出し入れができず、出たままになっている。妊娠期間は約90日で、1回に1～8頭の子を出産する。生まれた子にはうなじから背にかけてマントのようなたてがみがあるが、離乳する頃にはなくなる。【園内ゾーン】アフリカの動物（ゾーン2）→マップを見る【そのほか】陸上で最速の動物、チーター。その速さは驚異的なスピードで、右に出るどうぶつはいません。では、実際どのくらいのスピードで走ることができるのでしょうか？チーターの速さの秘密とともに紹介します。 チーターってどんなどうぶつ？ チーターはライオンやトラと同じ大型のネコ科の仲間。主にアフリカのサハラ砂漠以南のサバンナに暮らしています。大型のネコ科の中では小柄な方で、体長は約100～140cm、しっぽの長さは約70～80cm、体重は40～65kgほどです。速く走ることに特化した体のつくりをしているため、歯も小さめでケンカは強くありません。そのためせっかく速く走って捕まえた獲物をライオンやヒョウ、ハイエナに奪われてしまうことも。この事態を避けるため、夜行性のライオンたちを避けて日中、朝や夕方の涼しい時間帯に狩りをします。警戒心が高く、捕まえた獲物は木や岩の陰に運んで周囲を警戒しながら早めに食べ終えます。獲物はインパラやガゼルなど小型のウシ科やウサギ、イボイノシシ、ダチョウなど。チーターの天敵はライオンやヒョウ、ハイエナのほか、子どもはワシに狙われることもあります。 チーターの名前は「斑点」を意味するサンスクリット語（古代インドの言葉）に由来します。ヒョウ柄とは異なり、ひとつひとつが丸い斑点模様です。お腹は白く、しっぽの先はしま模様になっています。体の斑点模様は、草の影に紛れるとカモフラージュ効果を発揮します。顔に涙のように走る黒い筋は、日光の反射を防いで視界をクリアにする効果があります。 ライオンやトラのように咆哮をあげることはなく、飼い猫のように鳴いたり喉を鳴らしたりしてコミュニケーションをとります。 チーターはどのくらい速い？ チーターの最高時速はなんと100～120kmに達するといわれています。高速道路を走行する車を超える速さになります。これは瞬間的な速度で、このスピードで走り続けることはできません。あくまで全速力の速さなので、実際に狩りをするときにここまで速く走ることはほとんどないようです。獲物を追うことができるのは長くても1分ほど、距離にするとほんの200～300mです。短時間・短距離で決着をつけなくてはならないため、こんなに速くても狩りの成功率は50%程度になります。 チーターのすごいところは、瞬間的な速度だけでなく、加速力も優れていることです。走り始めから最高時速に近い速さまでわずか3秒ほど、たった数歩で加速します。これはスーパーカーもトップクラスの加速です。獲物に追い付くと急激に速度を落として止まることもできます。 チーターが速く走れる理由 チーターがここまで速く走れる理由を一言でいうと、速く走ることに特化した体の構造をしているから。まるで走るために生まれてきたような体のつくりをしています。 チーターは他の大型のネコ科と比較して体も足も長めです。背骨の柔軟性が高く、体をうまく曲げ伸ばしして歩幅をできる限り長くしています。足に注目すると、後足で蹴り上げたあと、地面に前足をつき、そのさらに先に後足を出して着地することで、歩幅を長くできるのです。全力疾走をしているときの歩幅はなんと約7m。走っている間、体はほとんど空中にあり、まるで空を飛んでいるような状態です。 さらに足先の爪はネコのように隠すことができず、いつも出たままになっています。この爪はスパイクの役割を果たし、地面をしっかり捉えて蹴り出すことに役立っています。また、頭も耳も小さいので風の抵抗を受けにくくなっています。 体と同じくらいの長さのしっぽは、方向転換に役立ちます。追われた草食動物は、ジグザグに走って逃れようとします。この動きに着いていくため、チーターは疾走中にしっぽを使って空中で体の向きを変えることもできるのです。 また歯が小さい分、鼻腔が広く、全速力のあとに速やかに酸素を取り込めるようになっています。大きな心臓や肺も、全身を使って高速で走ることを支えています。 チーターは絶滅危惧種 チーターはIUCN（国際自然保護連合）のレッドリストで絶滅危惧種に指定されています。かつてはアフリカ大陸とアラビア半島、インド中部まで幅広く生息していました。ツタンカーメン王の墓からはチーターに関わる遺物も出土していて、古代エジプトでは神聖な動物とされていたこともわかっています。チーターの数と生息地はここ100年の間に大きく減少し、現在はアフリカ東部と南部のほかに、北アフリカの一部とイランに少数の個体群が残るのみとなっています。現在の野生の個体数は推定約6500頭で、今後も減っていくことが予想されています。 チーターの数が減ってしまった要因は気候変動や開発による生息地の減少、人間の侵入などさまざまですが、家畜を襲うことから農家に疎まれ、撃たれてしまうことも問題となっています。ナミビアでは番犬で家畜を守るプロジェクトを導入し、各農家に無償で作業犬を提供。チーターによる家畜の被害を抑えつつ、現地の人々に野生動物の保護の重要性を伝え、チーターの個体数の回復に成功しました。 生息地から遠く離れた日本でも、全国の動物園でチーターが飼育されています。わたしたちがチーターを知って、チーターのためにできることを考えることも、保護の一歩となる可能性があるでしょう。 まとめ チーターが速く走れる理由を紹介しました。チーターの生まれ持った素質には到底叶いませんが、歩幅を大きくし、しっかりと地面を蹴り上げて空中の滞在時間を増やすことを意識すれば、わたしたちももっと速く走ることができそうです。速く走りたいときは、チーターの姿をイメージしながら試してみてくださいね。 世界にはたくさんのネコ科の動物たちが存在していて、ライオンやトラのような大型動物は動物園でも人気者です。チーターも見た目のカッコよさや足が速いことが有名で、とても人気者ですよね。しかし、ネコ科動物の一部は絶滅危急種、または絶滅危惧種に指定され、保護の対象になっているものが少なくありません。「チーター」もそんなネコ科動物の仲間で、やはり今後の生存が危ぶまれている存在です。今回は、チーターの速さの秘密や、その生態や特徴についてご紹介させていただきます。大型ネコ科と小型ネコ科チーターは、ネコ目（食肉目）ネコ科チーター属の動物です。ちなみに、チーター属に分類されるのはチーターのみです。まず、ネコ科の動物は、大型と小型に分けられています。大型ネコ科には、ライオンをはじめドラ、ヒョウ、ジャガー、そしてチーターなど。一方の小型ネコ科には、オオヤマネコ、ピューマ、ボブキャット、イエネコ以外の小型ネコの総評とされるヤマネコなどが含まれます。最初のネコ科の動物が現れたのは、約四千年前のことです。ネコ科の種は幅広い環境に適応できたため、現在でもアフリカ、アジア、南北アメリカに、野生の個体が生息しています。現在、これらの生育地のほとんどは保護されているため猟などは禁止されています。大型ネコの中でも、ヒョウ、ジャガー、チーターの３種は、その大昔同じ動物だったとされており、長い年月をかけた進化の過程で、それぞれに違った特徴を持って別れていったわけです。もしかすると今後何千年、何万年と経った時には、現在とはまた違ったものに進化しているのかもしれませんね。 チーターの特徴、顔の黒い線は「アイブラック」？チーターは、古くは熱帯雨林地域を除くアフリカ大陸全域、パレルチナやアラビア半島、インド等にも生息していましたが、現在ではアフリカ大陸（熱帯雨林域は除く）とイランのみに生息しています。したがって、アフリカ大陸に分布している「アフリカチーター」と、イランに分布している「アジアチーター」、世界には2種類のチーターが存在しています。体長１１０～１５０cm、体重約３５～７０ｋｇほど、長い足と尾を持っています。細身な体型ですが、名ハンターらしく猟犬のようにがっしりとした胸をしています。小さな頭とアゴに短い鼻、小ぶりな丸い耳を持っています。背中の色は褐色がかった黄色で小さな丸い斑点が広がっており、腹部は白となっています。顔に近づくほど模様は少なくなり、チーターの特徴とも言える目から口元にかけて黒い線が長く伸びています。一説にはこの黒い線が、昼間に狩りをするチーターの「アイブラック」の役割を果たしているのではないかとされています。「アイブラック」とは、よく野球選手などが目の下などに貼っている黒いテープです。屋外球場のデーゲームなどでよく目にしますが、あれは太陽光が目の下で反射してしまうのを防ぐためのものです。黒色が光を吸収してくれるというわけです。アイブラックは、あくまで一説ではありますが、多くのネコ科の動物が夜行性なのに比べて、唯一昼間に狩りを行うチーターならではの進化なのかもしれませんね。チーターの生態、大人になれるのは約３割以下！？チーターは主に草原や藪地に生息しています。見た目はそっくりなヒョウは木の上で生活していますが、チーターは基本的には地表で単独で生活しています。ヒョウは非常にアゴが強いため、自分の倍以上の体重の獲物でもくわえて木に登ることができます。木の上に獲物を運ぶのは、他の動物たちにエサを横取りされないためですが、チーターは力が弱いため真似できない芸当なのです。小顔のチーターはアゴの力が弱いため、動物の死骸や骨なども食べないとされています。チーターの生息数が減少した原因のひとつに、その繁殖形態が関係しています。チーターは、子供が生まれるまでに約９５日かかり、さらに成獣になるまで約２０ヶ月を要します。この間、メスのチーターは子育て期間となるため繁殖を行わないことも、個体数が減少した原因のひとつとされているのです。チーターの生まれたばかりの子供の体重はおよそ３００ｇで、大きさは３０cmほどです。褐色の毛色をしており、背中には灰色の鬣（たてがみ）があります。１回び出産で４、５匹の子供を産みますが、病気や他の動物に襲われるなどが原因で、幼獣時の死亡率は７０％以上と言われています。無事に成獣になれるのが３割にも満たないとは、自然界の厳しさが伝わってきますね。チーターの平均寿命は１２～１４年ほどです。生まれてから約１年半ほどで狩りを覚えて、やがて母親の庇護の元を離れて行くのです。独立するまでの間に、母親からしっかりと狩の仕方を学びます。時には家族で協力し合いながら、また時には母親が生け捕りにしてきた獲物で狩りの練習を行ったりします。チーターの狩り、その成功率は？チーターの主な獲物は、小型の草食動物でガゼルやインパラなどですが、場合によっては野うさぎや鳥類なども狩ることもあります。狩りの方法は、獲物に５０～３００ｍまでじりじりと接近してから一気に襲い掛かります。この接近距離が狩りの成功のポイントとなります。ネコ科動物の中で、唯一チーターだけは爪の出し入れが自由にできません。この爪は走る際のスパイクの役割の他にも、獲物に爪をかけやすいなどのメリットがあります。また、アゴが弱いチーターは、ライオンのように噛み付きながら獲物を倒すことができません。そのため、前足の爪を使って獲物を転ばせてから噛み付くのです。チーターが獲物にしているガゼルやインパラなどは、高速でジグザグに動きながら逃げ回ります。それを追いかけるチーターもジグザグに動かなければなりませんが、この時にスパイク爪と同様に大きな役割を果たすのが長い尻尾です。この尻尾を巧みに操って方向転換をしながら、獲物を追いかけるのです。そして前足で叩いて獲物を転ばせる、またはバランスを崩させて倒すのです。ヒョウなどは首に噛み付いて、首の骨を折って即死させますが、チーターは窒息させて獲物を殺します。アゴの弱いチーターには骨を折る力がないからなんですが、とにかく速く走るために進化を遂げたチーターならではの弱点かもしれません。ちなみに、チーターの狩りの成功率はおよそ50%だそうです。意外に低いと思ってしまうかもしれませんが、これはサバンナの動物の中ではかなり高い数字なのです。百獣の王ライオンは20%ほどしかないらしいので、チーターが優秀なハンターだということが分かりますね。チーターの狩りの映像です！世界最速スプリンター・チーターの速さの秘密チーターが世界最速スプリンターである理由には、・筋肉質で細い、流線形の体を持っていること・ネコ科特有の、非常に柔軟性に優れた脊髄を持っていること・鼻の穴が大きいため肺活量が多いことこれらが速く走るために大いに役立っているのです。チーターの最高速度は時速９０km以上とされており、動き始めてから２秒でおよそ時速７０kmのスピードに達します。しかしこの速度を保ったままで、長い距離を走ることはできません。全速力で走ることができるのは、１０～２０秒程度、距離にして３００～４００メートル以上は走り続けることが出来ないのです。これは早く走ることで、多くのエネルギーを消耗してしまうことと、体内に熱がこもりすぎるためと言われています。また、チーターは100km近くで走りながら、ほぼ一瞬で止まることもできるのです。車で考えたら100kmの状態からの急停車はとても無理なので、チーターのスピード制御性能の凄さが分かりますね。ちなみに人類最速と言われているジャマイカのウサイン・ボルト選手の記録は、１００メートル９．６３秒。チーターは１秒で約２５メートル、スタートからの加速を考えても１００メートルを５～６秒で走ることができそうですから、当然ながらチーターの圧勝ですね。チーターの天敵たちアゴが弱く戦うことに向いていないチーターには天敵も多く存在します。特に、狩りがあまり得意ではないとされているライオンやハイエナなどが、チーターが仕留めた獲物を横取りすることはよく知られています。せっかくのご馳走もこれらの天敵たちにやって来られては、そそくさと獲物を置いて逃げるしかありません。チーターはライオンやハイエナと違い単独で行動する生き物です。そのため、怪我を負うことは生命の危機に直結します。そしてこれらの天敵たちは、時にチーターの子供を襲って殺してしまいます。常に生命を脅かす恐ろしい存在なんですね。チーターが１日に食べる肉の量は約３キロとされていますが、いつも都合よく狩りが成功するとは限りません。場合によっては１週間、１０日間以上エサにありつけないことも自然界では珍しくありません。やっと捕まえた獲物も運が悪ければ、天敵に奪われることもあり、常に飢えと戦っていると言っても過言ではありません。水分は約４日に1度ほどでも構わないようで、乾燥には強いようです。チーターの性格、危険性は？ネコ科の大型動物の中でも小柄なチーターの性格は、比較的温厚で賢く人にも懐く性格とされています。海外でも保護施設などで、人間によって育てられたチーターが人や犬などと仲良くしている姿の動画も数多く見られます。撫でられながら喉をゴロゴロと鳴らしている様子は、まるで大きなネコのようにも感じますが、いつどんな衝動で野生の本能が牙を向くかはわかりません。人間はその体に何一つ武器を持っていませんが、チーターには鋭い爪と牙があります。最悪致命傷を負う可能性だってあるのです。そんなに多くは無いですが、チーターに襲われて重傷を負ったという報告もあります。海外ではこのように猛獣と呼ばれる動物をペットとして飼う人もいるようですが、チーターが紛れもない肉食動物である以上、接する人間側にも専門的な知識と経験が必要ですね。チーターの危機「絶滅危急」から「絶滅危惧」へ現在チーターは「絶滅危急種」として保護の対象となっています。これはチーターがこの世に生き残れるかどうかの危機的な状態にあるということですが、この危機は私たち人間が引き起こしたものです。チーターが生息するためには、広い面積が必要ですが、それを人間は開発目的のために環境破壊し続けています。また、家畜を襲うと駆除された過去、そして近年ではペットとして高値で取引されるために密猟も横行しているのです。絶滅させないためには、長期に渡る集中的な保護が必要です。チーターは行動圏が広いため、保護されている土地もそうでない土地も移動します。そのため保護地と非保護地区の両方の取り組みが、保護するにあたり必要となるのです。チーターは現在「絶滅危急」に分類されていますが、これを「絶滅危惧」に早急に引き上げるべきだとされています。チーターは加速しながら急速に絶滅に向かっていると懸念する研究者たちの間では、「絶滅危惧」に指定されることによって、国際的な保護活動が形成されることに期待を寄せているのです。まとめチーターは、アフリカとイランに生息するネコ科の動物です。時速90km以上のスピードを出し、世界で最も速く走ることのできる動物として知られています。その脚を使った狩りは成功率が高く、優秀なハンターと言えます。また、比較的温厚な性格で人間にもなつくことから、海外ではペットにしている人もいるそうです。しかし、環境破壊や密猟のためその個体数は減少し、絶滅危急種とされています。世界最速の動物を絶滅させないため、長期に渡る集中的な保護が必要だと思われます。 03/02/202006/03/2025Animal Facts チーターの性格や繁殖・寿命、狩りなどチーターの一生 / チーターの種類がわかる記事地球上で最もあしが速い哺乳動物といえば？多くの方が「チーター」と答えられるでしょう。その魅力的な身体能力と容姿から、チーターの知名度はかなり高いです。一方、チーターを飼育している動物園は全国で13か所のみ。実際のチーターを見たことがある方は意外と少ないかもしれません。今回のzoo zoo diaryは知っているようで知らないチーターの種類や生態と特徴を紹介します。 さらに、世にもめずらしいキングチーターの正体に迫ります。Contents 食肉目ネコ科チーター属。ヒョウとおなじような黄色の毛におおわれ、輪のない黒い斑点模様があります。小柄でスマートな体はいかにもあしが速そうな動物です。Acinonyx jubatusIUCNレッドリスト　危急（VU）CITES　附属書I生息　アフリカ大陸とイラン　7000頭体長　130cm尾長　70cm体高　75cm体重　オス50kg メス35kg違いむかし、チーターは北アメリカから中国、ヨーロッパを経て、最終的にアフリカ大陸に移りすんだと考えられています。かつては世界中に分布していましたが、環境の変化や密猟によりチーターの生息域は断片化。およそ100年の間に90%近く減少しました。現在チーターはアフリカ大陸の一部とイランに生息しおり、その生息数は1万頭未満。絶滅のおそれが高い動物（IUCNレッドリスト危急）です。現在、チーターの種類は1種。さらに生息地ごとに4亜種にわけられています。かつてはアフリカ大陸南部および東部に生息するチーターを別亜種としていました。2017年の遺伝子研究により1つの亜種に統合されました。食肉目　Carnivora ネコ科　Felidae チーター属　Acinonyxチーター　Acinonyx jubatusA. j. venaticus　　イランA. j. hecki　　アフリカ大陸北西～西部A. j. soemmeringii アフリカ大陸北東部A. j. jubatus　　アフリカ大陸東～南部※アジアチーターとアフリカチーターの2つにわける説ありかつては広く分布していたチーターですが、現在は限られた地域に点在しています。なかでもイランおよびアフリカ大陸北西部に生息するチーターは数がすくなく、絶滅寸前の状態（IUCNレッドリスト深刻な危機）です。アフリカ大陸の北西、北東そして東～南と3つの地域に3亜種のチーターが存在します。かつては東と南のチーターは別亜種でしたが、2017年に改定されました。アフリカ大陸東部と南部にはケニアやタンザニア、ボツワナや南アフリカ共和国といった動物大国をふくみます。そのため、亜種【A. j. jubatus】の生息数が圧倒的におおい状態。野生チーターの50%（約3500頭）が南アフリカ、そして30%（約2100頭）が東アフリカに生息します。北西および北東のチーターは数百頭ずつと推定され、局地的な絶滅がせまっています。アフリカ大陸北西部に生息するチーター【A. j. hecki】は別の名を「サハラチーター」といいます。開拓や密猟にくわえ砂漠化がすすむアフリカ大陸北部では、チーターやその獲物をふくむさまざまな動物が減ってきています。サハラチーターの生息地はアルジェリア、ニジェール、ベナン、ブルキナファソの4か国の一部だけ。生息は500頭以下、そのうち繁殖可能な個体は250頭程度と考えられています。IUCNはサハラチーターを絶滅寸前を意味する深刻な危機（CR）に分類しています。【最新情報】2020年5月、10年ぶりにアルジェリア南部・アハガル山地でサハラチーターの姿が撮影されました。チーターはアフリカのイメージが強いですが、実はアジアにも生息しています。IUCNは亜種として登録していますが、アフリカのチーターと異なる独立種とする説があります。かつては、地中海沿岸やアラビア半島からインドまで分布していました。アジアチーターが生息する国々では貴族たちが生け捕りにしたチーターを飼育・訓練し、シカやガゼルの狩りに利用していました。野生のチーターが減るうえに、野生ガゼルも減少します。さらに生息地破壊がかさなり、次々と地域的な絶滅が発生しました。現在、アジアチーターの生息地はイランのみ。そのため「イランチーター」とも呼ばれています。個体数は50頭未満と考えられ、いつ絶滅してもおかしくない状態です。一方で、サハラ砂漠北部に生息しているチーターがアジアチーターではないかと噂されています。この地域でチーターが多く生息するアルジェリアでは遺伝子研究を実施中です。アジアチーターはアフリカのチーターより小柄で頭が小さく淡色。さらに肩や腹の毛が長いのが印象的です。インドはもともとアジアチーターの生息地。現地では狩猟のパートナーとして身近な存在でした。ところが、飼育のため、娯楽のために利用されつづけたインドのチーターは1950年ごろに絶滅しました。以前からインドはチーター絶滅によって崩れた生態系バランスをもどすために、チーターの再導入計画を練っていました。2022年9月に8頭、2023年2月には12頭のチーターがクノ国立公園【Kuno National Park】に放たれました。再導入されたチーターはアジアチーターではなく、アフリカ（ナミビア）のチーター。最終的に50頭のチーターを連れてくる予定です。ざんねんながら、2024年1月までに導入されたチーター20頭のうち7頭が亡くなっています。しかし、2023年3月には初繁殖に成功。人工哺育ではありますが、無事に1歳をむかえました。アフリカとアジアでは気候や土壌のちがい等の影響が気になるところですが。やってきたチーターと生まれたチーターたちが健康でいられることを、先住動物たちとバランスがとれることを願います。世の中にはキングと名の付くチーターがいます。その由緒は模様。通常のチーターは黄色の体毛に黒い斑点があります。一方、キングチーターは背面に帯状の黒い模様があります。下の写真、手前の背を向けて横になっている個体に注目してください。手前：キングチーター明らかに斑点ではない、太く黒い線があります。通常のチーターの中で異彩を放つ存在です。見た目がまったく違うチーターとキングチーター。しかし、遺伝的には同じであることが判明しています。つまり、キングチーターはクロヒョウなどと同様、劣性遺伝により誕生したチーターです。2022年12月現在、日本では4頭のキングチーターに会うことができます。チーターの種類【まとめ】1種4亜種 アフリカ大陸　北西部 = サハラチーター（500頭以下）アフリカ大陸　北東部アフリカ大陸　東～南部　（全チーターの大多数を占める）アジア　　イラン = アジアチーター（50頭以下）キングチーターは種類ではないここから登場するチーターは、アフリカチーターを参考にしています。チーターの一般的な体長は1.2メートル前後。オスは50kg、メスは30kgほどの個体が多く、細身で小顔な印象です。オスの方がメスより大きく、最大1.5メートル、体重70kgほどに成長します。黄色い体毛に黒い斑点、ヒョウのような「輪」模様はありません。また、チーターには目頭から口にかけて黒いたて線があります。涙のように見えることからティアーライン【Tear Line】涙の線と呼ばれています。ぜんぜん似ていないのに意外と間違われるチーターとヒョウ。では2種の違いをチェックしてみましょう！まず生息地が異なります。チーターはアフリカ大陸とイランのみ。一方のヒョウは順応性が高くアフリカからロシア、東南アジアまで広く分布しています。ヒョウは体長1.6メートル前後。チーターに比べると胴体や頭が大きく見えます。体重はオス60kg、メス40kgほどと、チーターより10kgも多いです。獲物が豊富な地域では体重90kgほどのヒョウも報告されています。チーター 体長　130cm尾長　70cm体高　75cm体重　オス50kg　メス35kg模様　黒い斑点　ティアーラインヒョウ 体長　160cm尾長　90cm体高　70cm体重　オス60kg　メス40kg模様　黒い斑点　ロゼットまた、ヒョウの体には斑点だけでなく、花のような模様（ロゼット）が入っています。並べてみると、その違いは簡単。チーターの方がヒョウより小さく細いうえに、模様もまったく異なります。チーターとヒョウのちがい【まとめ】大きさ　チーター ＜ ヒョウ模様　　チーター（斑点 ＋ ティアーライン）　　ヒョウ（斑点 ＋ ロゼット）基本的に単独行動を好むチーター。母親と子は1年半ほどいっしょに過ごします。チーターのオスは縄張りをもちますが、メスは比較的自由に移動できます。そのため、行動範囲はメスの方がひろい傾向にあります。ライオンやヒョウと狩りや休む場所がかさならないよう、ひっそりと暮らしています。長きにわたってチーターは単独行動と思われていました。ところが、オスは兄弟や若いオス同士で群れをつくることがわかってきました。オスの群れは「コアリション」と呼ばれ、ライオンの兄弟もコアリションを形成することが知られています。協力して縄張りを守ったり、狩りを行ったり、複数頭ならではのメリットがあります。生息地および獲物の減少の影響か、複数頭のチーターが行動を共にする光景はしばしば観察されるようになりました。最大で8頭（オス5頭、メス1頭とその子2頭）のグループが発見されています。【YouTube】BBC Earthで8頭のチーターの群れをチェック！社会性に乏しいといわれていたチーター。獲物減の問題を解決するため、群れで大きな獲物をしとめ分けて食べる「社会的生活」に変わりはじめているのかもしれません。チーターは争いを好まず、臆病な性格です。体が細く顎も小さなチーターはライオンやハイエナにはかないません。たとえ空腹であっても、他の肉食獣の姿が見えると、獲物を置いて走りさっていきます。チーターのマーキングに強い攻撃的な意味合いはなく、自分の居場所を知らせたり、相手を避けたりするためと考えられています。チーターは温厚でヒトになつきやすく、飼育が比較的容易な野生動物のひとつ。海外の動物園ではチーターが動物アンバサダーとして育てられています。動物アンバサダーとは、動物や環境の大切さを伝える場に登場するマスコットキャラクターのようなもの。人気の高いチーターをアンバサダーにすることで、来園者が増加。結果として、多くの方が野生生物を学ぶきっかけとなっています。また、美しい容姿はお金持ちのステータスとしてあつかわれ、ペット需要が高まりました。しかし、ワシントン条約により学術目的以外の輸出入が禁止されているチーターを手に入れることは困難です。そこで、あらわれるのが動物最大の敵「密猟業者」チーターは高額で取引されています。生け捕りにされた赤ちゃんチーターたちは粗悪な環境で運ばれ、大半は輸送中に亡くなってしまいます。そのため密猟者はたくさんのチーターを捕まえています。結果、野生チーターが激減。いまなお密猟・密輸がたえず、チーターは絶滅の危機に瀕しています。チーターはネコ科に分類されています。体長は1メートルを超え、大型ネコ科動物「ビッグキャット」とも呼ばれます。しかし、ヒョウやライオンとは異なる点が3つあります。ライオンやトラは大きな声を出して威嚇や主張をおこないます。一方、チーターは吠えません。家ネコや鳥のような声を出すだけです。ボリュームも小さく、とても可愛らしい印象です。【YouTube】富士サファリパーク公式でチーターの可愛い鳴き声をチェック！ネコは基本的に夜行性。夜間でもわずかな光を取りこみ、目視することができます。ところが、チーターは暗くなるとほとんど目が見えません。つまり、昼行性の動物なのです。チーターは明るくなりだした明け方や、暗くなる前の夕方に狩りをおこないます。顔にある黒い筋模様（ティアーライン）は、日光のまぶしさを軽減するためだろうと考えられています。日中に活動するチーター特有の進化です。チーターが木に登っているという観察記録は少なく「木登りが苦手なネコ」といわれています。ところが近年、研究が盛んになるにつれ、チーターの木登りは以前より確認されるようになりました。周囲の確認や単なる遊びのために木登りをしていると報告されています。スピードを追求したチーター。木に登らずとも走り去ることで危険を回避できます。つまり、苦手というより木登りの必要性が低いから木登りをしないのかもしれませんね。チーターの狩りは基本、単独。一部は群れを成して狩りをおこないます。嗅覚ではなく視覚をつかってターゲットを探し、見つからないときには10km以上もの距離を歩きまわります。群れからはぐれたインパラやトムソンガゼルなどチーターの獲物は自分より小さい動物がほとんど。体勢を低くし獲物に忍び寄り、あっという間にとらえることができます。一方で、持久力のないチーター。実は全速力で追いかけられるのは、ほんの数百メートル。時間にすると20秒ほど。相手もあしが速いため、いかに気づかれずに近寄れるかが重要です。コアリションの場合はヌーやシマウマなど大型動物も狙います。しかし、ライオンやトラのような立派な牙がないため、群れでかかっても息の根を止めるのに時間がかかります。仕留めようとしている獲物を逃がしたり、奪われたりしないように注意を払っています。【YouTube】BBCでチーターの狩りをチェック！大食漢のイメージのライオンやトラはエサがあるときに大量に食べ、1週間以上絶食することもあります。ところが、チーターの成獣は2～3日に1回、母チーターに関しては毎日狩りをして食事をします。大型ネコ科動物としては狩りの頻度がおおい動物です。悲しいかなチーターは狩りに成功したとしても、略奪されることが多いのが事実。その場合、日に何度も狩りをしなければなりません。その分、体力を消費しエネルギーを必要とします。ハイエナやリカオンに比べると、効率が良いとはいえないかもしれません。体長1メートル以上の肉食獣ではあるものの、自然界におけるチーターの地位は非常に低いと考えられています。チーターの顎や歯は小さく、ライオンやヒョウのように一撃で獲物を仕留めることはできません。ときには、相手の息の根を止めるのに20分以上かかります。しかも全速力で走ったあとは全く動けない時間があります。食事の前だとしても、酷使した体を休めなければなりません。通常、単独で行動しているチーターは、休んでいる間にライオンやハイエナなどに獲物を横取りされることもしばしば。しかし、追いかけることはしません。負けることがわかっているからです。ひとやすみして、また狩りに出かけます。肉食動物のなかで弱いチーター。実は大きな草食動物にとっても「こわくない」存在です。チーターのちいさな歯で噛まれても、シマウマやキリン等にとって致命傷にはならないからです。近年は動物園でもチーターとシマウマの混合展示を見かけます。不思議に思えますが、自然界ではごく一般的な光景といえます。【関連記事】大分アフリカンサファリ｜チーターとシマウマの混合展示 野生では雌雄ともに単独行動のチーター。発情期のみ、メスとオスが会合します。妊娠期間はおよそ3か月。この間もメスは自分で狩りをし、栄養を蓄えます。そして、300グラム前後の小さな子を複数頭出産します。体力を消耗した母親は産後すぐ狩りに出かけなければなりません。そのため、生まれたての子はいきなり放置されます。赤ちゃんだけの無防備な状態はしばらく続きます。この期間に亡くなる子も少なくありません。子育ては母親のみ。子連れのチーターは毎日寝床を変え、隠れるように生活しています。チーターの赤ちゃんは頭から背中にかけてふさふさの毛が生えています。子どものうちだけ生えているふさ毛は草むらや茂みに同化し、敵に見つかりづらくなる効果があります。おとなは顔が小さくシュッとした雰囲気をもつチーター。しかし、赤ちゃんは顔も体も丸く、ぬいぐるみのようです。チーターの成長は非常に早く、生後6週間ごろには母親とともに動き、肉を食べはじめます。1年以上は母親のもとで生きる術を学びます。チーターは1歳半までにひとり立ちし、2歳前後で性成熟を迎えます。興味深いことにチーターの幼獣の行動には雌雄差があります。メスは母親の狩りについていき、ハンティングの勉強をします。一方、オスは狩りより遊びや食べることに夢中になっています。それゆえ、メスは狩りが得意で単独生活を送る一方、オスは狩りが苦手で群れ生活を送る傾向にあると考えられています。野生チーターの赤ちゃんの生存率は非常に低く、5%程度といわれています。チーターの狩りの成功率は50%ほど。しかし、ターゲットが近くにいない乾季や他の肉食獣に略奪されたときなどは、食糧難におちいります。また、ライオンの縄張り内ではライオンに殺されてしまうこともあります。その他、チーターの幼獣は、猛禽類やハイエナ、ヒヒなど、さまざまな動物に狙われます。さらにチーターは遺伝子多様性にとぼしく免疫機能が劣っているという研究報告があります。生後数か月の間に病気で亡くなる幼獣がおおいと考えられています。一般に野生チーターとくにメスは単独行動をとっています。ところが、動物園では複数頭飼育されているためか、チーターの発情が起こりにくく繁殖がむずかしいといわれています。知名度は高いものの、個体数が少ないチーター。IUCNレッドリスト危急（VU）に指定され、ワシントン条約で取引が規制されています。新しい個体を導入することは容易ではありません。国内の動物園では連携をとり、繁殖活動に力をいれています。2022年は3月に和歌山県・アドベンチャーワールドで6頭、8月に静岡県・富士サファリパークで3頭、12月に群馬県・群馬サファリパークで4頭のチーターが生まれ育っています。経験を重ね、国内のチーター繁殖成功がふえてきています。このように動物園における繁殖活動がチーター絶滅防止の鍵となっています。野生チーターではメスの最長が14年、オスは10年。12歳以上のメスが子を連れている報告がないため、繁殖可能年齢は10歳ごろだと考えられます。しかしながら、野生の子チーターが無事に生育する可能性は5%程度。晴れて成獣になったとしても野生での寿命は短く、5年ほどしか生きない個体もおおいといわれています。生息地の破壊による食糧難や密猟などが主な原因です。いずれもヒトの影響であることを忘れてはいけません。一方、飼育下チーターの寿命は10年以上。なかには15年以上生きるチーターもいます。チーターの種類・生態と特徴【まとめ】チーターの種類　1種 アフリカチーター　3亜種アジアチーター　1亜種（イランに約50頭のみ）キングチーター = 背に帯状の黒線があるチーター *種ではない群れ　メス単独　オス群れる傾向狩り　1～3日おき → 横取りされることが多く日に何度かおこなうことも出産　1度に複数頭　生存率5%寿命　飼育下10年以上　野生5～10年美しい体毛にしなやかな体。類まれなスピードを持つ、地上最速の哺乳類チーター。この素晴らしい動物も絶滅の危機に瀕しています。イランに生息するアジアチーターは残り50頭ほどと絶滅間近。アフリカチーターにその日が来てもおかしくありません。野生での生存率が低いチーターの絶滅を防ぐためにはヒトが介入せざるをえません。チーターの生息地では密猟を防ぐとともにチーターの保護や治療、繁殖などに取り組んでいます。最終的には野生に帰し、生息数増加を目標としています。幸運なことに日本では近年チーターの繁殖がふえています。野生では生存率5%という非常にめずらしいチーターの赤ちゃんや、10歳以上のご長寿チーターに会えることに感謝ですね。チーターに会える動物園や赤ちゃん誕生ニュースは別記事で随時更新中です！以上、チーターの豆知識でした。【参考】国際自然保護連合日本動物園水族館協会 一般 はじめに チーターは、その卓越した速度と独特な生態で知られる陸上動物です。 世界最速の哺乳類としての称号を持ち、その俊敏さと適応力により、サバンナの厳しい環境を生き抜いてきました。 しかし、チーターの生態は単なる速さだけではなく、進化の過程で培われた生存戦略、狩猟方法、社会構造など、多くの興味深い特徴を持っています。 本記事では、チーターの基本情報から進化の歴史、狩猟の方法、生態系における役割、そして近年の保護活動に至るまで、詳細に解説していきます。 チーターの基本情報と特徴 チーター（Acinonyx jubatus）は、ネコ科に属する哺乳類であり、現存する唯一のチーター属の種です。 この動物は、アフリカ大陸のサバンナ地帯やイランの一部に生息しており、その生態は他の大型ネコ科動物とは大きく異なります。 チーターの最大の特徴は、時速100km/hを超える驚異的な速度です。 この速度を可能にする要因として、しなやかな体、長い四肢、軽量な骨格、発達した肺や心臓が挙げられます。 最高速度を誇る陸上動物としての知名度 チーターは、世界で最も速い陸上動物として広く認知されています。 短距離のスプリントにおいては、わずか3秒で時速90km/hに達し、最大で120km/h近くまで加速することが可能です。 これは多くのスポーツカーと同等の加速力であり、その機動性は他の捕食動物とは一線を画します。 しかし、チーターの速度には限界があり、全力疾走できるのは約30秒間とされています。 この制限は、急激なエネルギー消費と体温上昇によるものです。 進化と生存戦略の概要 チーターは、その進化の過程で他のネコ科動物とは異なる特徴を獲得してきました。 一般的なネコ科動物が筋力と咬合力を重視するのに対し、チーターは瞬発力と持久力のバランスを取る方向に進化しました。 これは、群れを作らず単独または小規模なグループで狩猟するチーターにとって、最適な生存戦略だったのです。 また、チーターは通常、狩りの際に視力を頼りに獲物を追跡します。 鋭い視覚を持ち、100メートル以上先の小さな動きにも敏感に反応できるため、遠くの獲物をいち早く見つけることができます。 さらに、夜間の狩猟を得意とするライオンやヒョウとは異なり、チーターは主に日中に狩りを行うという特徴があります。 本記事では、チーターの生態をより深く理解するために、以下のような構成で進めていきます。 まず、チーターの生態や狩猟の方法について詳しく解説し、その後、チーターが直面する環境問題や絶滅の危機について触れます。 最後に、現在進行中の保護活動や、チーターを取り巻く国際的な取り組みについて紹介します。 それでは、チーターの驚くべき生態と進化の秘密について、詳しく見ていきましょう。 チーターの分類と進化の歴史 チーターは、ネコ科の中でも独自の進化を遂げた動物であり、その分類や進化の歴史を紐解くことで、他のネコ科動物との違いが浮かび上がってきます。 現存するチーターの特徴は、約数百万年の進化の結果であり、祖先種の絶滅を経て現在の姿へと至っています。 ここでは、チーターの分類や学名の由来、進化の過程、そしてヒョウやジャガーといった他のネコ科動物との違いについて詳しく見ていきます。 ネコ科の動物の中での位置づけ チーター（Acinonyx jubatus）は、ネコ科（Felidae）に属する哺乳類ですが、ネコ科の中でも特異な進化を遂げた動物として知られています。 ネコ科の動物は大きく「ヒョウ亜科（Pantherinae）」と「ネコ亜科（Felinae）」に分類され、チーターは後者のネコ亜科に属します。 ヒョウ亜科にはライオンやトラ、ヒョウ、ジャガーなどのいわゆる「大型ネコ科動物」が含まれ、これらは強靭な顎や発達した筋肉を持つのが特徴です。 一方、ネコ亜科にはイエネコやピューマなどが含まれ、チーターもこのグループに属していますが、他のネコ科動物とは異なる特徴を多く持っています。 特に、チーターは唯一、「爪を完全に引っ込められない」ネコ科動物であり、これが高速走行に適した進化の一つと考えられています。 属名「Acinonyx」や種小名「jubatus」の由来 チーターの学名はAcinonyx jubatusとされており、それぞれの名称には特定の意味が込められています。 属名「Acinonyx」：ギリシャ語の「akinitos（不動の）」と「onyx（爪）」を組み合わせたもので、「引っ込めることができない爪」を意味します。 種小名「jubatus」：「たてがみを持つ」という意味で、幼いチーターが持つ長い体毛（たてがみ）に由来します。 この学名の通り、チーターはネコ科の中で唯一、爪を完全に引っ込めることができず、これは高速走行時のグリップ力を向上させる役割を果たしています。 また、幼体の頃には背中に長い毛があり、これは捕食者から身を守るために周囲の環境に溶け込む役割があると考えられています。 進化の過程と祖先種の絶滅 チーターの進化は、約800万年前のミアシン時代（中新世後期）に遡ります。 この頃、ネコ科の祖先が分岐し、チーターの祖先も他のネコ科動物とは異なる進化の道を歩み始めました。 現生チーターに最も近いとされる祖先は約300万年前に出現したとされ、特に北アメリカ大陸に生息していた「ミルダチス（Miracinonyx）」という種がチーターの祖先に最も近いと考えられています。 この種は現生のチーターと非常によく似た体形をしており、俊足を武器に狩りを行っていました。 しかし、約1万年前の氷河期の終焉とともに、大型草食動物の減少により、ミルダチスを含む多くのネコ科動物が絶滅しました。 その後、アフリカ大陸に生き残ったチーターの祖先が現在のチーターへと進化しましたが、遺伝的多様性が極端に低下したことが知られています。 特に約1万年前の「ボトルネック現象」によって、チーターの遺伝子プールが著しく縮小し、現在のチーターは極めて近縁な個体が多い状態となっています。 この影響で、病気や環境変化に対する耐性が弱いという問題を抱えています。 他のネコ科動物との違い（ヒョウやジャガーとの比較） チーターは見た目がヒョウ（Panthera pardus）やジャガー（Panthera onca）と似ていますが、実際には大きな違いがあります。 以下の表で、その違いを比較してみましょう。 特徴 チーター ヒョウ ジャガー 体の特徴 細身で流線型の体型 がっしりとした体型 筋肉質で重厚な体型 模様 小さな黒い斑点 ロゼット状の斑点（中央が空洞） ヒョウよりも大きなロゼット模様 爪の特徴 完全に引っ込められない 完全に retractable（引っ込められる） 完全に retractable（引っ込められる） 狩りの方法 高速で追いかけて仕留める 待ち伏せして一撃で仕留める 強靭な顎で獲物を一撃で仕留める 生息地 アフリカ、イラン アフリカ、アジア 南アメリカ チーターは、ネコ科の中でも唯一、持久力と瞬発力を活かした狩猟スタイルを持ち、他の大型ネコ科動物とは異なる独自の生態を持っています。 また、ヒョウやジャガーが木に登るのが得意であるのに対し、チーターは木登りが苦手であり、これは体の構造や爪の違いに起因しています。 このように、チーターは進化の過程で独自のニッチを確立し、現在の生態系に適応してきたのです。 チーターの身体的特徴と適応 チーターは、その驚異的なスピードに特化した身体構造を持つネコ科動物です。 軽量で流線型の体型、強靭な筋肉や骨格、特徴的な涙模様、そして独特な爪の構造が、彼らの狩猟スタイルに適応しています。 また、稀に見られる「キングチーター」と呼ばれる突然変異も、進化の中で興味深い特徴の一つです。 軽量で流線型の体型とスピードに特化した形態 チーターは体重が軽く、しなやかな流線型の体型を持つことで、陸上最速の動物として知られています。 成体の体重は約40～65kgで、頭部は小さく、脚は長く、胸部は広く発達しており、これらが高速走行に適したバランスを生み出しています。 速さを支える筋肉や骨格の構造 チーターの走行能力は、その骨格と筋肉の特性によるものです。 背骨はしなやかで、バネのように伸縮することで、一歩ごとに大きな推進力を生み出します。 また、長く強靭な脚は地面を力強く蹴り、最大時速100km近くまで加速することを可能にしています。 特徴的な黒い涙模様の役割 チーターの顔には目の下から口元にかけて黒い涙のような模様があり、これは強い日差しの下での視界をクリアに保つ役割を果たします。 また、この模様は獲物を狙う際に光の反射を抑え、狩猟成功率を高めると考えられています。 半ば収縮しない爪と狩猟における利点 チーターの爪は完全には引っ込まないという珍しい特徴を持ちます。 この構造により、走行時に地面をしっかりと捉えるグリップ力が向上し、急な方向転換が可能になります。 まさに、短距離スプリントに特化した適応といえるでしょう。 キングチーターの突然変異について 稀に発現する「キングチーター」は、通常のチーターとは異なる模様を持ちます。 これは遺伝子変異による縞模様の出現が原因で、特に南アフリカで確認されています。 見た目がユニークであるため、一部では神秘的な存在とされていますが、遺伝的には通常のチーターと変わりません。 生息地と分布 チーターは主にアフリカ大陸を中心に分布し、広大なサバンナや草原、疎林地帯で生息しています。 かつてはアジアにも広く分布していましたが、現在ではインドなど一部の地域で再導入が進められています。 彼らの生息環境は多岐にわたり、狩猟に適した開けた土地で進化してきました。 アフリカ大陸を中心とした現在の分布 現存するチーターのほとんどは、アフリカ大陸のサハラ以南に分布しています。 特に、ナミビア、ボツワナ、ケニア、タンザニアなどが主要な生息地となっており、広大な草原やサバンナに適応しています。 ナミビアは世界で最も多くの野生チーターが生息する国として知られています。 かつてはアジアにも分布していた歴史 チーターはかつて、中東や南アジア、さらにはインドにも生息していました。 しかし、乱獲や生息地の破壊により、アジアの個体群は20世紀初頭までに急速に減少しました。 インドでは1947年に最後の野生個体が確認され、その後絶滅したとされています。 砂漠やサバンナ、疎林など多様な環境への適応 チーターは基本的に開けた土地を好みますが、その生息地は意外と多様です。 アフリカでは主にサバンナや草原に生息しますが、砂漠地帯や乾燥した疎林でも確認されています。 特に、イランに残るアジアチーターは乾燥地帯に適応しており、砂漠でも狩りを行う姿が観察されています。 インドへの再導入計画について 近年、インドではチーターの再導入計画が進められています。 この計画では、アフリカのナミビアや南アフリカから個体を移送し、かつての生息地であったインドの国立公園で野生復帰を試みています。 2022年には最初のチーターがインドのクノ国立公園に放たれ、今後の繁殖と定着が期待されています。 生態と社会構造 チーターはネコ科動物の中でも特異な社会構造を持ち、オスとメスで異なる行動パターンを示します。 オスは群れ（コアリション）を形成し、協力して縄張りを守るのに対し、メスは単独で広範囲を移動しながら生活します。 また、狩猟方法や生存戦略においても、他の大型肉食獣とは異なる特徴を持ち、特にライオンやハイエナとの競争関係が彼らの行動に大きな影響を与えています。 単独行動のメスと群れを作るオスの違い チーターの社会構造は、オスとメスで大きく異なります。 メスは基本的に単独行動を好み、繁殖期以外は他の個体と接触することが少なくなります。 彼女たちは広範囲を移動しながら狩りを行い、数年ごとに異なる地域へと移動することもあります。 この移動性の高さは、オスの縄張りを超えて繁殖の機会を広げるための戦略と考えられています。 一方、オスは兄弟や同じ時期に独立したオスとともに「コアリション」と呼ばれる小さな群れを形成します。 この群れは2～4頭の個体からなり、一緒に狩りをしたり、縄張りを守ったりします。 コアリションを作ることで、単独で行動するオスよりも生存率が向上し、メスとの交尾の機会も増えると考えられています。 しかし、コアリション内のオス同士にも階層があり、優位な個体が交尾の機会を独占することもあります。 縄張りを持つオスと移動するメスの行動パターン オスのチーターは縄張りを持ち、特定のエリアを支配することでメスとの交尾の機会を確保しようとします。 縄張りは尿や爪痕によってマーキングされ、他のオスに対して「ここは自分の領域である」と主張します。 一般的に、縄張りの広さは獲物の量や他のオスの存在によって決まり、狩りの成功率を左右する要因となります。 対照的に、メスは一定の縄張りを持たず、広範囲を移動しながら生活します。 これは、環境の変化に適応しやすくするための戦略であり、特に子育ての際には安全な場所を求めて移動することが多いです。 また、複数のオスの縄張りを行き来することで、遺伝的多様性を確保し、より健康な子孫を残すことができると考えられています。 狩りのスタイルと成功率 チーターの狩猟スタイルは、他の大型肉食獣とは大きく異なります。 ライオンやヒョウが待ち伏せ型の狩猟をするのに対し、チーターは視覚を頼りに獲物を発見し、短距離の高速追跡で仕留めます。 彼らは主に朝や夕方の涼しい時間帯に狩りを行い、シカやガゼルなどの小型の草食動物を標的とします。 狩りのプロセスは以下のような流れで行われます。 遠くから獲物を観察し、狩りの機会を見極める 草むらや地形を利用しながら、できるだけ近くまで忍び寄る 約30～50メートルまで接近した後、一気に加速して獲物を追う 時速100km以上のスピードで短時間の追跡を行い、前足で倒す 首を噛み、気道を塞ぐことで窒息死させる このようにチーターの狩りは一瞬のスピードに頼ったものですが、成功率は約40～50%と決して高くはありません。 成功しなかった場合は体力を消耗し、次の狩りまでしばらく休息をとる必要があります。 他の捕食動物との関係（ライオンやハイエナとの競争） チーターは優れた狩猟能力を持つものの、他の肉食動物との競争においては不利な立場にあります。 特にライオンやハイエナはチーターにとって大きな脅威であり、しばしば狩った獲物を奪われることがあります。 このため、チーターは狩りに成功したらすぐに食べるか、安全な場所へ運ぶことで生存率を高めています。 また、ライオンは縄張り意識が強く、チーターを敵対視することが多いため、チーターの個体数が多い地域ではライオンの数が比較的少ないという傾向も見られます。 特に、ライオンはチーターの子どもを捕食することがあり、幼獣の生存率は極めて低いとされています。 そのため、チーターの母親は子どもを守るために頻繁に移動し、外敵の目につかないように工夫しま

す。 一方で、ハイエナは強力な群れを形成し、チーターよりも力が強いため、狩りの成功率が高くても獲物を横取りされることが多くなります。 このような環境下で、チーターは「速さ」を最大の武器とし、戦うことなく回避する生存戦略を取っています。 総じて、チーターはスピードを活かした狩猟を行うものの、獲物を奪われるリスクが高いため、効率よく食事を取ることが重要になります。 また、ライオンやハイエナがいない地域ではチーターの個体数が増えやすい傾向にあり、生息地の環境によって競争の影響が変わることも知られています。 繁殖と成長 チーターの繁殖は、発情期の行動、交尾の仕組み、幼獣の成長過程に独特の特徴を持ちます。 メスは単独行動が基本であり、発情期になるとオスの縄張りを訪れて交尾を行います。 妊娠期間は比較的短く、一度の出産で複数の幼獣を産みますが、生存率は決して高くありません。 ここでは、チーターの繁殖から成獣になるまでの過程を詳しく解説します。 発情や交尾の仕組み チーターのメスは特定の繁殖期を持たず、一年を通して発情する可能性があります。 発情のサイクルは約12日間続き、この期間にオスと交尾します。 メスが発情すると、フェロモンを含んだ尿を撒いたり、鳴き声を発したりしてオスに存在を知らせます。 オスは縄張り内に入ってきた発情中のメスを見つけると、接近し交尾を試みます。 交尾は数日間にわたり複数回行われ、その後メスは再び単独行動に戻ります。 チーターは一夫多妻制ではなく、交尾のたびに異なるオスと繁殖することが一般的です。 これにより、遺伝的多様性が維持され、種の健康を保つことができます。 妊娠期間と出産の頻度 チーターの妊娠期間は約90～95日と比較的短いのが特徴です。 一度の出産で2～8頭の幼獣を産みますが、平均は3～5頭程度です。 メスは子育てのために静かで隠れやすい場所を選び、岩陰や茂みに巣を作ります。 出産の頻度は2～3年に1回程度とされ、繁殖成功率は他のネコ科動物と比べて低めです。 これは、幼獣の死亡率が非常に高いため、メスが次の妊娠に入る前にしっかりと子育てを行う必要があるからです。 特に、ライオンやハイエナなどの捕食者が多い地域では、母親が何度も子を失うケースも珍しくありません。 幼獣の特徴と高い死亡率 生まれたばかりのチーターの幼獣は体重300～500gほどで、体毛は灰色がかったふわふわした毛に覆われています。 この毛は「マンテ」と呼ばれ、生後数か月間にわたって背中に残ります。 マンテは草むらに紛れやすく、外敵から見つかりにくくする役割を持っていると考えられています。 しかし、幼獣の死亡率は非常に高く、生後数か月で死亡する確率は50～70%にも及びます。 これは、捕食者による襲撃だけでなく、食料不足や病気が影響しているためです。 特にライオンやハイエナはチーターの幼獣を見つけると積極的に攻撃するため、母親は頻繁に移動しながら子どもを守る必要があります。 成獣になるまでの成長過程 チーターの幼獣は生後1か月ほどで目が開き、歩行が可能になります。 この頃になると母親とともに移動するようになり、次第に狩りの技術を学びます。 生後3か月を過ぎると母親が狩った獲物を食べられるようになり、徐々に独立の準備が始まります。 6か月を迎える頃には狩りの練習を本格的に行い、母親のサポートを受けながら実際に獲物を追いかけることもあります。 生後1年を過ぎると、母親の元を離れて兄弟姉妹とともに行動するようになります。 オスの兄弟はそのまま「コアリション」として群れを形成することが多く、メスは単独で新しい生活圏を求めて移動します。 チーターは生後約2年で性成熟を迎え、繁殖が可能になります。 しかし、完全な成獣としての生活を確立するには3年ほどかかるため、それまでは生き延びるためのスキルを磨きながら成長していきます。 成獣となったチーターは、新たな縄張りを確立しながら生きていきますが、彼らの平均寿命は野生で7～10年程度、動物園などの保護環境では15年以上生きることもあります。 人間との関わりと保全状況 チーターは古代から人間と深い関わりを持ち、時には飼育されたり狩猟に利用されたりしてきました。 しかし、近代に入ると毛皮の取引や害獣としての駆除が進み、個体数が急激に減少しました。 現在では、国際的な保護活動が進められているものの、依然として多くの課題が残されています。 ここでは、チーターと人間の歴史的関係と、現代の保護活動について詳しく見ていきます。 古代エジプトやムガル帝国での飼育・狩猟利用 チーターは古代エジプト時代から人間に飼育されていました。 壁画や彫刻には、首輪をつけられたチーターの姿が描かれており、王族や貴族のペットとして珍重されていたことがわかります。 エジプト人はチーターを「神聖な動物」として崇める一方で、狩猟にも利用していました。 特にムガル帝国（16～19世紀）では、チーターを使った「動物狩り」が盛んに行われました。 ムガル皇帝たちは何百頭ものチーターを飼育し、訓練を施して狩猟に活用していました。 この時代、チーターは「狩猟の道具」として繁殖よりも捕獲に依存していたため、野生個体が減少する一因となったと考えられています。 毛皮目的や害獣駆除による個体数減少 20世紀に入ると、チーターは毛皮のために大量に狩猟されました。 特に1950年代から1970年代にかけて、チーターの美しい斑点模様が高級ファッションとして人気を博し、密猟が横行しました。 この影響で、野生のチーターは急激に減少し、一部の地域では絶滅の危機に瀕しました。 さらに、農業の発展により、家畜を襲う害獣として駆除されるケースも増えました。 牧場主たちはチーターが家畜を襲うことを嫌い、毒や銃を使って駆除しました。 この結果、特にアジアのチーターはほぼ絶滅し、現在ではイランにわずかに生息するのみとなっています。 保護活動と国際的な取り組み（IUCNの評価やワシントン条約） チーターの個体数が危機的状況にあることが明らかになると、世界各国で保護活動が始まりました。 現在、IUCN（国際自然保護連合）はチーターを「危急種（Vulnerable）」に分類し、厳格な保護措置を推奨しています。 また、ワシントン条約（CITES）によってチーターの国際取引は厳しく規制されています。 さらに、いくつかの保護団体がチーターの生息地を守るための活動を行っています。 例えば、「Cheetah Conservation Fund（CCF）」はナミビアを拠点に、家畜農家との共存を目指すプログラムを実施し、チーターが害獣として駆除されるのを防いでいます。 また、インドでは一度絶滅したチーターを再導入する計画が進められています。 2022年にはアフリカのチーターがインドに移送され、保護区での適応が試みられています。 このプロジェクトは、チーターの生息域を広げる新たな試みとして世界的に注目されています。 動物園での飼育と繁殖の試み 現在、多くの動物園でチーターが飼育されており、繁殖プログラムも進められています。 しかし、チーターは他のネコ科動物と比べて繁殖が難しく、人工繁殖の成功率は低いとされています。 その理由の一つは、チーターが野生環境での特定の行動（縄張り争いや求愛行動）を必要とするためです。 飼育下ではこのような自然な刺激が不足し、繁殖意欲が低下する傾向があります。 この問題を克服するために、一部の動物園では自然に近い環境を再現し、繁殖を促進する取り組みが行われています。 例えば、アメリカの一部の動物園では、チーターの繁殖成功率を上げるために「仲介犬」を利用しています。 これは、犬と一緒に育てることでチーターがストレスを軽減し、繁殖しやすい環境を整えるというユニークな方法です。 また、体外受精や人工授精の技術も開発されており、将来的には飼育下での繁殖成功率が向上する可能性があります。 動物園での繁殖が進めば、野生への再導入や遺伝的多様性の確保に役立つと期待されています。 チーターの未来と課題 チーターは急速に減少しており、絶滅の危機に直面しています。 生息地の消失、獲物不足、遺伝的多様性の低下が主な要因であり、人間活動との衝突も深刻な問題です。 持続的な保護策が求められています。 生息地の減少と獲物不足 農地の拡大や都市開発により、チーターの生息地は過去100年で大幅に縮小しました。 また、獲物となる草食動物の減少も深刻で、餓死のリスクが高まっています。 保護区の拡大や適切な管理が急務です。 遺伝的多様性の低下と繁殖の課題 チーターは遺伝的多様性が低く、病気への耐性が弱いことが問題です。 さらに、精子の異常率が高く、繁殖成功率が低いため、動物園や保護施設での人工授精が試みられています。 チーターの保護には、人間との共存が不可欠です。 地域住民と協力しながら、密猟対策や持続可能な土地管理を進めることが求められています。 私たちにできることは、保護活動の支援や環境保全への関心を高めることです。 スリランカとはどんな国か？歴史や気候、観光などわかりやすく解説！ -一般 author 関連記事